

10. ほうらい祭と新町

浅野 尊男

- I はじめに
- II ほうらい祭の概要
- III 1993年度のほうらい祭
- IV 考察

I はじめに

白山麓から平坦地へ出た地にある鶴来地区（旧鶴来町）は以前、山と里との間の物産取引の街であったが、いくつかの理由により、それまでの広域を対象とした商売は難しくなっている。そして、活気があった鶴来地区も変わり、商売をやめていく家も多い。商売をやめてサラリーマンになる家もあるが、金沢へ通える距離にある事もあり、若者が家の残る事例も多い。また通勤のサラリーマンが鶴来地区へ移住してくる事もあり、人口自体はさほど減っていない。しかしそれまでの商売の街としての活気がなくなった現状に対して、鶴来地区に住む人々の反応は様々だ。仕方のないことと現状を受け止めている人もいたし、さびしいことと感じている人、なんとか活気を取り戻そうとしている人もいる。

これらの話と合わせて、鶴来地区の年に一度のほうらい祭の話も聞いた。いろいろ大変な事もあるが、やはりこの土地の人にとってのお祭りであるせいか、明るい顔でほうらい祭の話をされる一方、ほうらい祭が年々さびしくなっているとも言われた。このことと街に活気がなくなったこととは関係があるように思った。祭りがさびしくなったのは、祭りをひっぱる若者が参加しなくなったからという話から、この土地に生きている若者の祭りへの関わりかたを通して、若者の選択と、さらには変化した街に対する様々な反応の理由が分かるような気がするからだ。このような印象を基に本稿を進めていくこととなる。

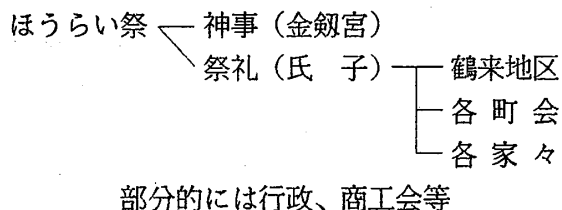
構成として、IIでほうらい祭のなかで若者や若者と関わる人たちのことを書き、ほうらい祭における若者の立場を浮き上がらせると共に、ほうらい祭を概観する。IIIでは1993年度のほうらい祭の活動を追いながら、実際どのように若者が祭りに関わっているのか確かめたい。そしてIVでは若者がほうらい祭に参加しなくなっている現状についての考察を加えたい。

II ほうらい祭の概要

ほうらい祭に関わる組織は大きく2つ、神事を司る金劔宮と祭礼を行う氏子集団に分けられる。氏子とは氏神、ここでは金劔宮によって守られる土地に住む人々、つまり鶴来地区に住む人々

をいう。金劔宮とその氏子の関係はほうらい祭においても補完的なものである。（神事と神事に関わる部分は9章を参照）ここでは、鶴来地区の姿を知るため氏子によって行われる祭礼の部分を見ていきたい。

図-1 ほうらい祭に関わる組織



1. 鶴来地区

ほうらい祭の祭礼における活動の主体は各町内の青年団であるが、祭礼全体としての調整は鶴来地区としてなされている。各町内の主な活動は神輿の巡行に獅子舞、造り物のいずれかを出すことであるが、各年どの町内が獅子舞あるいは造り物を出すかは鶴来地区内のローテーションにより決定される。

獅子舞は、4つの獅子頭を持つ町会ないし町会のグループで出される。ほうらい祭で使われる獅子頭は旧鶴来町にあった4社（恵比寿社・大国社・大鳥社・日吉社）の氏子であった各町会がそれぞれ作ったものと伝えられており、その時の世話した町会がその権利をもっているとされている。4つの獅子頭を持つ町会、町会グループはそれぞれ

黒獅子……今町、新町、本町1丁目、上東町

菊獅子……本町2、3、4丁目、古町、大国町、水戸町

赤獅子……清沢町

魁獅子……知守町、下東町

であるが、それぞれの獅子頭の年度毎の持ち廻りは、その獅子頭の関係町会間で、その獅子頭に対する権利、各青年団の事情を通して毎年協議される。例えば菊獅子の場合は大国社の氏子が製作し所有してきたもので、かつて下本町（本町3、4丁目）・中本町（本町2丁目）、古町の3町の廻り獅子だった。当番順は「本下町→中本町→下本町→古町→下本町」と下本町は隔年であったが、「菊獅子の権利は下本町がその2分の1を持っている。」と言い伝えられていたからだった。大国町は1940（昭和15）年に古町から分離されたが、古町と共に当番をつとめた。そして社会情勢の変化によって「本町2丁目→本町3、4丁目→古町・大国町となった。その後本町2丁目に若者が少ないという理由で、3、4丁目と合同することとなり、また水戸町が創設され古町、大国町と合同した。更に、1992（平成4）年からは本町2、3、4丁目と古町、大国町、水戸町が交互につとめることになった。（『おやま道』53、83）

こうした獅子の持ち廻りにより、獅子頭の廻った町会がほうらい祭に獅子舞で出すことができる。一方造り物は、獅子を持たない町会やその年獅子舞を出さない町会などが、祭に出ようとする時に出す。その際各町会の多くが単独で出しているが、祭において縁の深い町会（獅子舞を合同で出す町会等）と合同で出す町会もある。

このように各町内間の事情により、獅子舞いか造り物かという二者択一がなされている。

2. 町会

ほうらい祭に参加する各町会は、それぞれが活動の主体となって獅子舞、造り物を出す。ここで、新町の例を中心に、祭りに参加する町会とそこで活動する若者についての記述をしていきたい。

実際祭りに参加するかどうかは各町会ごとにある青年団で決める。というのも実際祭りを動かしていくのは青年団だからである。

新町において青年団は町内に住む高校生ぐらいから厄年（42歳）までの男性が集まったもので、ほうらい祭における活動が主であるが、そのほか親睦のためにも集まる。現在団員は、15人程度で人数が少なく活動が苦しいそうだ。他に若者はいるのだが、サラリーマンで時間の余裕がない等の理由で青年団に入らない人が増えている。他の町会でも人数が少なく満足に活動できないところが増えているという。厄年になるとほうらい祭の際に神輿を担ぎ、青年団を卒業するが、年齢制限のない町会もあるという。

祭りに参加することを決めるとそれぞれの町会へ青年団長が参加許可をお願いしに行く。というのも各町会がそれぞれの青年団に対し、責任をもっているからである。また、活動に使う祭りの予算も町内で組む。予算の組み方は町会によって違うが、新町では祭りが終わった後で決算書のような形で町会に「予算」を提出する。このような予算の組み方は新町がかつて商売の町であったからであり、かかった分だけポンと払う商売人の気質のせいであるという。獅子舞を出す年のほとんどの支出は祭りの期間の飲食代と反省会費（つまり飲み代、反省会は祭りの後に行われる）である。造り物の年には、造り物製作に150万円程かかる。収入としては町会費から補助金とハナ（祝儀）が基本で、足りない分を各戸に寄付金として平等に割る。ハナはどの程度入るかだいたい分かるもので、どの家がいくら位ハナをうつのかも青年団をやっていると分かる。

寄付金も、以前は各戸の財産、所得等をふまえて計算され、格差がつけられていた。しかし現在サラリーマンの増加等で均等に割り振られるようになったという。

新町は黒獅子の持ち廻りの町会の一つであり、獅子舞を出す年には単独で出す。獅子舞を演舞する主体は各町会の青年団である。演舞は獅子を退治する棒振りと、獅子頭を持つ頭振りに分けられるが、棒振りは、小学生から振り始める。一人棒は小学生男子が振り、二人棒、三人棒となると中学生、青年団の若い人が振る。五人棒や、頭振りとなると青年団の上の人が加わる、というのも複数の棒振りは難しく練習がいるし、頭振りは難しいばかりでなく、重い獅子頭を持っ

て舞えるのは大人でないと難しい。しかし、役によって年齢差をつけるのはこれらの事ばかりでない。演舞は、普通ハナをうたれた家の前で行うが、ハナの金額の多寡により一人棒から五人棒までの演舞の差をつける。金額が少ないと小学生が1人かわいらしく振り、多いと威勢のいい若者たちが力強く獅子を退治するというわけである。また、演舞全体に責任をもてる者が頭振りをできるということもある。

また、獅子舞には囃子方もつくが、現在は太鼓（小学生女子）のほかはカセットテープに録音したものを使っている。以前は太鼓のほかに笛（男性）や三味線（女性）があり、遊郭の芸妓の引く三味線に合わせ練り歩いたそう（Nさん45歳）。こういった囃子や祭り唄の文句は昔から多く引き継いできたものである。

また造り物を出す年には、青年団で造り物の製作を始め、組み立てていく。途中で青年団を卒業した人が見に来てくれ、差し入れもあるそうだ。造り物の製作技術は各町内で受け継がれ、町内毎に作風がある（新町は武者ものが多い）が、こういった作風、技術は青年団の年配者から若い人へ、又は青年団を卒業した人から青年団員へと受け継がれる。また年毎に、よりおもしろくより華やかな新しい趣向が若い人たちによってこらされる。しかし、近年造り物製作に参加する若者が減って、合同で造る町会もある。また担ぎ手が少なくなっているところは造り物の下に車輪をとりつけている。

祭りの際に、青年団に対する責任をもつのが袴役である。以前は造り物同士のぶつけ合いがあったり、けんかがあったりと血気盛んだったが、袴役はそういった事を防いだり、仲をとりもったりした。以前は各町会の有力者がしていたようだが、現在では各町会の各班ごとに割りあてたり、青年団を卒業したものが何人か出たりする。祭の時に青年団がハッピー姿になるのに対し、袴役は晒しに袴姿となり、獅子、造り物の前や後を歩く。また、獅子舞の演舞や造り物に対して出されるハナを帳面に記録するのも袴役の仕事である。祭の予算を組んでいるのも町会であり、袴役は祭りにおける町会の代表である。つまりは、町会が各々の青年団に対し責任を負っているということになる。

3. 家

祭りの時、回ってきた獅子舞、造り物が自分の町会のものであればもちろんだが、他の町会のものでもその町会と関係がある（例えば嫁がその町会からきているとか、親戚がその町会にある等）家では、ハナをうち、また用意があればもてなす。特に商家では、日頃の顧客に対する謝恩の意味で、どの獅子舞、造り物に対してもハナをうち、もてなす。以前は、商売相手であった町外の山や里の人も祭りを見に来ており、そういった見物の客も振舞酒でもてなした。特別な客以外は気軽に玄関に腰をかけるか、立ったままで接待にあずかる。また親戚が来て、それらをもてなす。親戚が来ない時も押し寿しと呼ばれる祭りの寿しを配る。祭りの前日には家の女性たちがもてなす際のごちそうを作る。

以前家々では、祭りの前日に大掃除をし、「みす」を下げ、「しめ縄」を張り、夜の明かり採りと町筋の賑わいを演出する「あんどん」がかけられていたが、現在でも大通沿いの旧家（代々商売を続けてきた家）等一部で行われている。また獅子舞、造り物参加者の食事はかつてはすべての各町内の有志（資産家）の家が賄われていた。

このように、各家々は神輿と、神輿と共に巡行する獅子舞、造り物を迎え、もてなすものである。

Ⅲ 1993年度のほうらい祭

Ⅱでほうらい祭の概要を述べたが、以下では実際の祭りの活動を1993年度の例を通してみていく。特に新町の青年団の活動を追いながら青年団に関わる記述をしたい。

1993年度には新町に獅子頭が回り獅子舞を出すことになった。その準備から祭り当日の活動を書くこととなる。

1. 祭りの準備

だいたいどの町内でも9月の初め（祭り当日は10月3日、4日なので1ヶ月ほど前）から準備にとりかかるわけだが、9月の第1日曜日に町会に青年団長がお願いし、祭りへの参加の許可をもらう。といっても新町は毎年獅子舞か造り物を単独で出しているの、ほとんど形式上のこととなっている。

獅子舞を出す年には祭りの準備という演舞の稽古が主となり、稽古には集会場及び集会所前の広場を使う。以前は何かにつけて個人の家を借りてやっていたが、1982年に「集会所」建設の声があがり、新町の様々な業種の人協力し、各戸の負担金のほか寄付金（多くは商売をやっている資産家）もすぐ集まり、1983年に建てられた。集会所は現在新町の様々な用途に使われている。

棒振りの練習は集会所前の広場で、囃子は集会所の2階でしている。小学生は数が少ないので獅子頭持ち廻りの4町（新町、今町、古町、上東町）合同で練習しに来ている。午後6時頃に学校が終わった小学生たちが集会所にかけつけ、青年団長や何人かの青年団の人が集会所を開けたり、道具を出して用意する。外はもう暗く、広場にはライトが灯される。練習は7時頃より始まり、小学生はめいめい棒ふりの練習をし始め、青年団の人が見て回る。小学生の低学年、特に1年生は初めてなのでとりあえず覚えて振れるようになるまで教え込む。しかし子供はあまり遅くまで練習させられないので9時ごろまでに帰す。子供には中^{なか}日と最終日にお菓子和ジュースを出す。小学生を帰す頃、仕事が終わった青年団員が集まってくる。最初は雑談しているが、10時頃より練習は厳しくなるそう。

そして追い込みの9月20日頃には本格的に稽古をし、仕上げに近づいていく。棒振りの小学生は一人一人青年団の人に点検され、青年団は青年団同士で又は青年団を卒業した人に確認される。

2. 10月2日

このように各町会での準備は仕上げを終えて10月2日を迎える。各家々は祭りの準備にとりかかるが、そのことは街の風景の変化にも現れる。大通り沿いには花飾りが飾られ、獅子頭を所有している旧家は獅子頭を飾る。神輿が通る所はしめ縄が張られ、所々にお祓い所が設けられている。そしてもう昼ごろには金劔宮の前通りに露店が並び出す。

正午に花火が何発か上がると同時に、カセットテープの祭りの囃子が大通りにまで聞こえてくる。

金劔宮では例大祭が始まった。その金劔宮で獅子は2日に、造り物は3日にお祓いを受ける。

新町の獅子舞は、午後より新町から大通りへと回り始めた。獅子舞についている人数は青年団が5人程、袴役が5人程、小学生が20人以上といったところだ。通りをカセットの囃子を流しながら歩いていく。

新町は自分たちの町内だから、ハナが多くうたれる。また大通りには商家が多く、商家はどの家もハナをうつのだそうである。3日には行列となって他の町内の獅子なり造り物が前後ろに並ぶ。するとハナが多くうたれるため行列が滞るので、前日のうちにやっておくのである。通りを進んでいくと、家の人がハナを持って青年団に渡しに来たり、商家のところに青年団員があいさつに行ったりする。打たれたハナは青年団が袴役のところへ持っていき、袴役は帳面に記録する。そして青年団員がその祝儀の多寡により一人棒から五人棒を振らせる。一人棒は小学生がきりりと演舞する姿がかわいらしい。二人棒以上になると青年団員がたくましく演舞する。ハナをうった家の人は家から出てきて家の前に立ち、演舞を見る。この演舞を見に、通りには人が集まる。獅子が退治されると、家の人達も通りの者も拍手を送る。青年団員がハナをうった家の人にあいさつをしながら、また通りを進んでいく。こうして途中休息を入れながら大通りを午後8時頃まで進んで引き上げていった。

こうして祭りの雰囲気が高まる中、家々の中では、女性たちが祭りの準備にいそがしい。特に行列をもてなす商家の家等はごちそうを作らなければならない。押し寿しを作っている様子をDさんのお宅で見せてもらった。台所でお姑さんとお嫁さんと娘さん3人で雑談をしながら作っているという感じで、すし作りの事になるとお姑さんがやはりくわしいようだ。押し寿しは各家庭ごとに作風があり、風味から中に入れる具まで、すし作りが受け継がれていくと共に家毎の味も残されていく。寿司を巻く笹は昔は山から取ってきたものだが、今ではスーパーに売っているものを使う家がほとんどだ。押し寿しを一晩おく寿桶は各家が持っており、1つの寿し桶に50個ほど入れる。こうして作った押し寿しは、行列の方にふるまうと共に、訪れたお客さんにふるまい、親戚の家に配り、自分の家で食べる。

3. 10月3日、4日

ほうらい祭りが本格的に始まるのは3日からだ。3日、4日に神輿が鶴来地区を回り、それと

共に競って各町内の獅子舞が演舞し、造り物が練り歩く。

正午前に各町内の獅子舞、造り物が次々に狭く急な坂を上って金劔宮に集まってくる。金劔宮前には既に多くの観客がつめかけており、その前で造り物が祭り唄を歌いながら練り歩くというパフォーマンスが行われる。

午後1時頃、発揚式を終え神社を出た神輿に続いて、獅子舞、造り物が各町内を回っていく。神輿を先頭に3日、4日に分けて鶴来地区を回るのだが、その区分は

カミ：新町、今町、本町1丁目、上東町、清沢町、日吉町、朝日町

シモ：本町2、3、4丁目、古町、水戸町、下東町

というもので、1年交替でこのうち一方を3日に回り、もう一方を4日に回る。1993年はカミから回っていく。

神輿の後の獅子舞、造り物の順番は前もって町内間で決めてあり、不公平のないように毎年いれかえている。1993年度は獅子舞が4、造り物が4出ている。これらが一列になって神輿の後に続いていくと長い行列となる。青年団、小学生の興奮とざわめきに加え、道を埋めるほどの観客たちにより、活気に満ちた祭りになる。青年団員が担いだ造り物は、威勢のいい祭り唄と共に通りを挟しと練り歩く。造り物は電線に引っ掛けるほどの大きさであるが、よく造ってあり、華やかでもある。造りを担ぐ青年団員はハッピー姿に化粧をしている。その化粧はきれいというよりも個性あふれる化粧である。獅子舞は、カセットから流れる囃子と共に、自動車にかぶせた獅子と共に移動する。獅子の胴体の中や、獅子をとり囲んでいる子供たちがにぎわしい。行列は、ゆっくりと力強く進んでいく。

家々では、神輿を先頭に獅子舞、造り物が来ると、出迎え、ハナを打つところもある。コースより少しはずれたところでも、獅子舞、造り物はハナをうたれるとその家の前まで行き、ハナを受けとる。そして獅子舞は演舞をするが、造り物はその家に造り物を向け、青年団員が大きな声でハナを受取ったことを報告し、全員で歓声をあげる。

このように行列は進んでいくが、金劔宮の前通り、大通り等人が集まっている広い場所に出ると、獅子舞、造り物は次々とお互い競い合ってパフォーマンスをする。造り物は威勢のいい祭り唄とともに造り物を揺さぶるように、通りいっぱいに練り歩く。獅子舞は派手な五人棒をたくましく演舞し、観客をひき寄せる。獅子舞に爆竹を多く使い、見物人を驚かせているところもあった。

こうして午後7時頃に神輿がコースを回り終えると、出し物は大通りでそれぞれのパフォーマンスを繰り広げる。このパフォーマンスは「盛り上がり」と言われるが、深夜まで続く。それぞれ通りに陣取り、夜仕事も終わり増える観客達に、より気合の入ったパフォーマンスをする。青年団員たちは、ハナをうたれた際に振るまわれたお酒などで、酔いがまわっているところもある。獅子舞は五人棒、十人棒を行い、観客の応援と拍手をもらう。造り物は、性的な意味の祭り唄を

唄いながら、勢いよく練り歩く。こういった盛り上がりはどれだけ観客を引きつけ、集められるかという町内間の競い合いであり、この街が客相手の商売の街であることと関わりあるように思う。観客も少なくなった10時頃、それぞれの出し物は神輿が休んでいる御仮屋と呼ばれる広場に戻っていく。

4日も昼に御仮屋から出発し、シモのコースを練り歩いていく。3日と同じように進んでいくが神輿は夜7時頃、金劔宮へ戻る。獅子舞や造り物はそこまでまた大通りへ戻り、最後の「盛り上がり」をする。その盛り上がりも終わると、出し物はそれぞれ町会へ引き上げていく。

4. 祭りのあと

祭りが終わった後、反省会、つまり青年団の飲み会があるし、町会の「予算」決算の際にも飲み会がある。こうして青年団どうし、青年団とそれを迎える町会が労をねぎらい、親睦がはかられる。

IV 考 察

以下ではほうらい祭りが鶴来地区にとってどのようなものであるか捉えた後、ほうらい祭に若者が参加しなくなっている現状を鶴来地区におこりつつある変化と合わせて考察したい。

1. ほうらい祭について

かつての鶴来地区の活気は、この街が商売の街だったことにより成り立っていたといえる。職人たちの生活も里、山を加えた広域の市場を持っていたことにより成り立っていた。この活気はいわば鶴来を中心とした交易圏の活気であり、鶴来の人たちはそういった活気にプライドを持っていたといえる。第2次大戦によって失われていた活気が戦後取り戻され、一時やめていたほうらい祭が再開されたときもまだこういった活気に支えられていた。

ほうらい祭の観客たちは鶴来地区の住民に加え、商売相手でもあった山や里の人も加え、通りはごったがえしていただろう。ハナをうたれて演舞する獅子舞や造り物に人は集まり拍手喝采を送り、あちこちの商家では振舞酒が出されただろう。何よりもほうらい祭が華やかさを競いあう祭りであり、どれだけ観客をひきつけるかを競う祭りであることが、この町の性格を強く表していると思う。町会間の対抗意識が、造り物のぶつけあいやをさせたりもした。自分の町内にプライドを持った若者同士はけんかもした。自分たちでその町を動かし、祭りを盛り上げているという意識も多分にあったようだ。以前、ほうらい祭を監視に来た警察官のサーベルを取り上げ、袋だたきにしたということもそれ故の事件だと思う。

また、この町が商売の町であったことは、ハナをうつという行為にも色濃くあらわれるように思う。かつての華やかさ故か商家は儲かるというイメージが町民にあり、寺社の増改築における寄付だけでなく、とりわけ祭り際には、すべての獅子舞、造り物がハナを受けとりに商家に寄る。これはまた、以前町内の有力者（資産家）が何かを言い出せば、町内も動いたし、言い出さ

ないと町内も動きづらかったところにも反映されていただろう。

また商家の方にしても、顧客になる可能性のあるすべての人に対応をよくしなければならないところもある。それ故商家は休憩の場所を提供し、酒類、食事等を出す。休憩に立ち寄る人は町内に関係なく、又観光客も多い。このように見知らぬ人でも接待するのは、以前顧客に対する感謝の意で、山の人、里の人に振舞ってからだという。

それだけでなく、商家のプライドという点もある。これは上述したような自分たちの活気に対するものであり、また商家への期待に対するものである。商家としての活気を見せることで、町内での家の力、他の町会に対する自分の町会の力を示すことができる。新町でも昔から「新町が一番」というプライドがあり、そのため経済的には苦しくても他より華やかにしているという。新町の獅子はよそに負けないと感じているし、造り物も単独の町会を出していることを誇りにしている。かつては造り物どうしのぶつけあいもあったそうだ。ハナについても、新町はハナが多く、それは商売の家の家が多いからだという。

このような商家優位の意識は、町会間だけでなく、町内の表通りと裏通り、さらには鶴来地区と新興住宅地のような地域における意識の差にも表れる。表通りにはどうしても商売の家が多くなるし、裏通りには職人が勤め人の家が多い。また新興住宅地には勤め人が移ってくる。職人や勤め人にハナをうつ必然性があまりない。その町内と特別な関係、例えば自分のその町内であるほか、嫁がその町内から来ていたり、その町内の親戚が祭りに参加していた場合にはハナをうつが、その他の町内にはハナをうつ義理もない。しかしほうらい祭はハナがうたれることにより活気が出るのであり、そうして神輿の行列を迎えられるのである。こうしてみると、ほうらい祭は鶴来地区が商売の街であったことをまだ残していることが分かる。

一方そういった街に生まれた人たちは、自分たちでの祭を行い、取り組んでいく上でその街にとけこんでいくように見える。獅子舞の演舞や造り物を作る技術、祭り唄等を受けついでいき、受け渡しをしていく過程で、同じ町内の年配の者と年下の者が親睦を深め、同世代の者ともより親密になってゆく。また行列で回り、商家等でもてなしてもらい際、他の町内の者とも顔見知りになる。そしてその地域のことをより知るようになると共に、祭りを、町内の年下の者をひっぱっていくように、後に町内をひっぱっていくだろうし、町内の者もそれを期待している。実際子供の時から獅子舞に慣れ親しみ、青年団で棒振り、頭振りとつとめた青年は、袴役、そして町会役員と町内を代表し盛り上げていく者となっていった。ほうらい祭は商売の街の性格の一面を持つほか、こうした地域の祭りといった一面を持っているのである。

2. ほうらい祭の現状

しかし、現在では鶴来地区は商売の街から変わりつつあり、勤め人の家が多くなっている。商売の街に生きていた人たちによって盛り上げられていたほうらい祭も様々なレベルで変化が起こり、ほうらい祭りの意味も変わりつつある。

それまでのほうらい祭が前述したようにまず商売の街の祭りであることは、勤めの家には不都合なことが多いものであった。通勤や残業のため、獅子舞の稽古に時間をさくのも難しいところがあるだろうし、祭り当日（10月3日、4日）に平日が当たると休みをとらなければならない。また、大学に入学して地元から離れたり、会社が忙しかったりして、数年間祭りから遠ざかるだけで祭りを縁遠いものを感じるようになるだろう。かつては地域に根づいた職業についていた人々も、転職することにより、地域の関心が薄れることになる。

また、かつて鶴来地区が流通の中心地だったことは、前述したようなハナをうち、華やかさを競うことによりものあがるほうらい祭を創った。勤め人の収入は一定しており、職人の収入は必ずしも安定していない。商売の家のように儲かっているという前提があるわけではない。

このようにしてほうらい祭の性格は、様々なレベルで変化がおきているが、一番問題となるのは若者が参加しなくなってきたことである。祭りの特徴である活気、華やかさがそのことにより失われつつあり、「祭りがさびしくなった」という声が聞かれるようになった。こういった声は、ほうらい祭の持つ性格からこれまでの商売の街の活気を懐かしく思うと共に、若者に対する期待が含まれていると思う。というのは、これまで若者が祭りに参加し盛り上げていくことは、前述したように、町内や鶴来地区を盛り上げていくことでもあったからだ。青年団員として祭りに参加するということは鶴来地区という社会に入っていく契機でもある。そういう若者たちが多く戻ってくれば、祭りだけでなく鶴来地区を盛り上げてくれるという期待が、祭りをみる大人たちの意識にあるように思う。

しかし若者が参加しなくなっているのも、勤めの人たちが参加しにくいのも同じ理由であると思われる。つまりほうらい祭が鶴来地区の商売の街としての性格を強く残しているため、そこではヨソ者だけでなく、もともと住んでいる若者であっても地域と関わりのない勤め人となれば、参加しにくくなっているように見える。

そして、ほうらい祭におけるその性格は家々のレベルより町内のレベル、町内のレベルより鶴来地区のレベルに強く言えることで、それはⅡで述べた獅子舞、造り物のシステムやハナをうつという慣習の中にみえる。それは、街の変化がこの地域においては、家々の職業の変化により始まったものであるからであると思う。勤めの人だけでなく、女性、そして若者たちも参加しやすい祭りであるためには、新しい枠組みが必要とされることであろう。

すべての地域の人を楽しめる祭りである枠組みが強く望まれることと思う。そのためにも祭りにおける青年団の姿を忘れてはならないであろう。